ドイツさんと久留米 第６回

ドイツさんと第九演奏

さあ指揮者の呼吸に合わせて！（以下、写真は全て久留米市教育委員会所蔵）

・塀の中のオーケストラ

「今でも、一番印象に残っているのは、日曜日の夕空に響くオーケストラの素晴らしい音色で、叔父の家（註：国分町日吉神社南側）は勿論、野中あたりにまで聞えてきました。」
（市民の証言）

音楽は童謡のようにドイツ人の身体に沁み込んでいるといわれます。収容所内では、楽器の調達から団員の確保まで、決して恵まれた環境ではありませんでした。それでも３つの楽団が誕生、交響曲から民謡まで多彩な曲目が演奏されました。特にベートーヴェンやワーグナー、グリーグ、メンデルスゾーン、R・シュトラウスなど、ドイツが誇る作曲家の作品は人気が高かったようです。コンサートの実施回数は、収容所楽団で約 150 回、シンフォニー・オーケストラで 50 回、室内楽団で 10 回と、合計 200 回以上にのぼるといわれています。この数は、徳島の板東収容所の約２倍にのぼり、久留米収容所では、活発な音楽活動が行われていたことがわかります。

コンサートの運営体制はよくわかっていません。会場の座席は、有料のⅠ席・Ⅱ席と無

久留米高等女学校での演奏。市民が初めて聴いた「第九」のメロディ

料席に分けられ、係が席の予約を受け付けていました。事前に作曲家名と曲目の解説、歌劇や楽劇の歌詞が掲載されたプログラムも有償配布されています。

楽器の不足は大きな問題でしたが、青島から持ってきたもののほか、アメリカのドイツ系市民からの支援がありました。金管楽器については、大正７年（1918）秋頃からようやく入手できるようになり、同年末からコンサートに使用できるようになりました。手作りできる楽器、例えばチェロやティンパニーなどは自作。弦などの消耗品や楽譜は、東京や大阪から取り寄せています。クリスマス、皇帝誕生日、美術工芸作品展など、様々なイベントでも音楽は欠かせません。捕虜たちの生活は、常に音楽とともにあったのです。

・市民が聴いた日本初の「第九」コンサート

年の瀬を迎えた日本各地には、ベートーヴェン作曲の「第九」のメロディが響き渡ります。世界的にみると、年末に決まった楽曲を演奏する習慣は、ほとんどないそうです。もはや日本人の「第九」好きと、師走の演奏と鑑賞は我が国の風物詩といえるでしょう。

この「第九」の国内初演は、大正７年（1918）６月１日に板東捕虜収容所（徳島県鳴門市）で行われた全楽章演奏とされることはよく知られています。しかしあくまでも収容所内での演奏で、日本人向けのコンサートではありませんでした。

久留米でも遅れること約一年半。大正８年（1919）年 12 月３日、久留米高等女学校（現県立明善高等学校）で第二・三楽章が演奏されました。これが日本人の聴衆を対象とした「第九」の初演奏となります。日本において、12 月に「第九」が定着した謎については

収容所中央広場でのコンサート

諸説ありますが、久留米における演奏がその先鞭をつけたといえるかもしれません。

さて、久留米高等女学校での演奏は約 3 時間にも及ぶもので、演奏する捕虜たちにとって大変印象深い体験だったようです。日記にも、彼らの目に映った演奏会当日の様子が生き生きと描写されています。少し長くなりますが、2 人の楽団員の日記を引用します。

「最後の数週間の騒ぎの中で、いくつか嬉しい出来事もあった。12 月初旬に我々のオーケストラが久留米の女学校から講堂でコンサートをして欲しいとの招待を受けたのだ。事務所が『30 人と 16 の楽譜台』の許可を与えたので、ある快晴の朝（12 月 3 日）、驚くことに歩哨なしで、陸軍軍曹一人に率いられて女学校へ出かけた。我々はとても気持ちよく迎え入れられた。始めに会議室に通され、そこで校長が訓辞を述べて大変親切に挨拶してくれた。それから女の先生方がコーヒーとケーキを供応してくれ、次に校長が学校は『謝礼』を出せないがその代わり感謝の印として古来の女流剣道（註：薙刀）をお見せしようと言った。そのため我々は体育館へ案内され、剣道の師匠の指揮の下で演習が行われた。それを描写するのは難しいが、そのこなれた愛らしい動きは我々に大きな喜びをもたらしてくれた。」（「エルンスト・クルーゲの日記」生熊文抄訳）

「そのうち 2 時になって、講堂へ向かった。講堂にはもう聴衆が集まっていた。低いベンチに 6 ～ 700 人の日本の少女たちが座っており、みんなお行儀よく手を膝に乗せて、期待に目を大きく開けてときどきこそこそ話したりしていた。ちょうど僕らの国の 10 ～ 14 歳の女の子がするのと同じだ。指揮者のヘルトリンク少尉がお辞儀をすると、少女たちも同じように頭を下げた。僕らは『ドン・ジュアン』の序曲から始めた。少女たちの拍手は何

久留米高等女学校での演奏会は 3 時間にも及んだ

とも奇妙に響いた。僕らは収容所の男たちの力強い手の鈍いゆるゆるとした拍手にしか慣れていなかったので、この新鮮な明るい音の拍手を聞くのは感動的だった。（中略）それからベートーベン（注 2）の第九の第二節を演奏したら、拍手がひときわ大きくなった。」（「フィッシャー回想録」生熊文訳）

「それどころか特別演奏項目もあった。小さな音楽家の少女が楽譜を持ってきて、はにかみながら『この曲』を演奏してくれないかと尋ねたのだ。それはシューベルトのセレナーデだった。通訳がそれを黒板に書くと、席中にどよめきが伝わった。アアとかオオとかいう声や囁き声がした所を見ると、この曲は明らかによく知られているらしかった。拍手もそれに相応してもっと大きかった。」（「エルンスト・クルーゲの日記」生熊文抄訳）

「この間に講堂の演奏が終わりになった。拍手は鳴り止まず、先生がとうとう静粛にさせた。少女たちは頬を紅潮させて帰っていった。僕らにはもう一度控室でケーキが出て、お別れのお礼の言葉があり、少女のサインがある絵葉書と帰路お気をつけてとの餞（はなむけ）の言葉をもらった。４時に（収容所へ）帰宅した。少女たちは手を振って『サヨナラ』と言った。」（「フィッシャー回想録」生熊文訳）

残念ながら久留米高等女学校では、「第九」の第 4 楽章が演奏されることはありませんでした。しかしその 2 日後の 12 月 5 日、収容所内において、女声パート抜きで「合唱」付きの全楽章が演奏されることになります。講和条約が締結され、収容所からの開放を目前に控えたこの日、捕虜たちはまさに「歓喜の歌」を高らかに歌い上げたのです。

我々はこうした楽しい日々の後、生まれ変わったようになった。ついにこの檻から逃れて、人々の間に混ざったのだ。」（「エルンスト・クルーゲの日記」生熊文抄訳）

久留米初の市民楽団「共鳴音楽会」。左端に水がめティンパニーが見える

・市民楽団の誕生と音楽への影響

収容所が開設された翌大正４年（1915）３月のことです。西洋音楽の研究・研鑽とその普及を目的とした市民管弦楽団「久留米共鳴音楽会」が結成されました。久留米高等小学校を会場として週１回の練習を重ね、大正６年７月、久留米高等女学校講堂で第一回コンサートを開催しました。その後も同校や日吉校、恵比須座などで演奏を続けています。

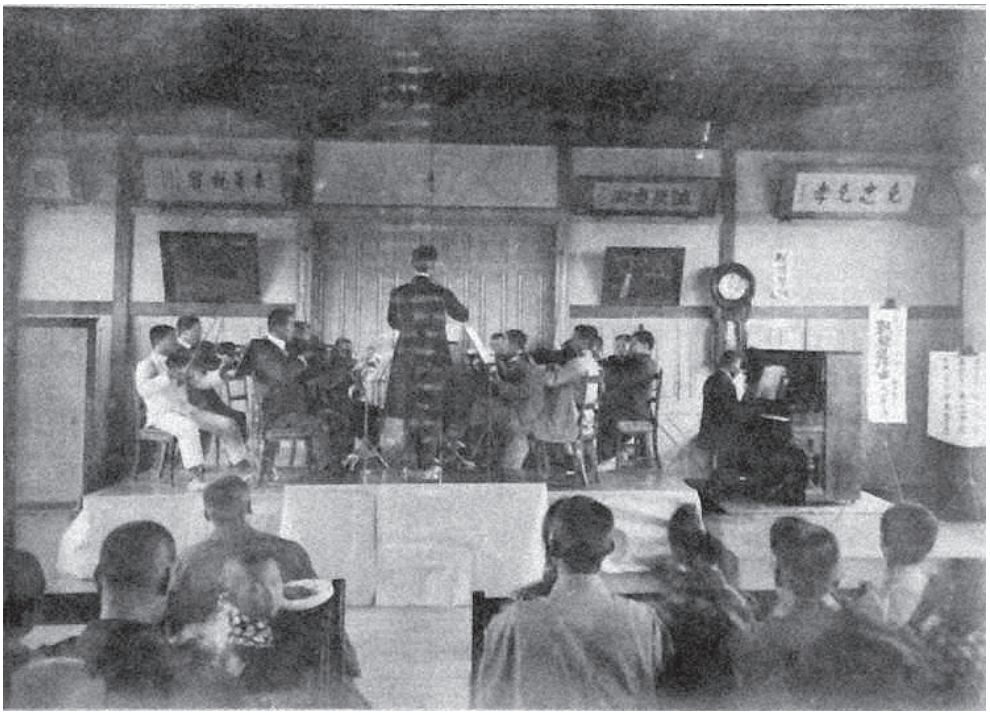
楽団は、捕虜から演奏技術指導を受けたほか、ティンパニーの製作法を伝授されたといいます。捕虜楽団では、大小２つのティンパニーを製作していました。大きい方は、水がめの底に穴をあけ手製の台に載せ、捕虜たちが飼っていた乳牛の皮を張ったものでした。小さい方は、植木鉢に本物のティンパニーの皮を使用し、台の底につけられたハンドルで音の調整ができたそうです。共鳴音楽会でも、捕虜楽団のティンパニーをモデルに製作しようと、適当な水がめを探して宮ノ陣橋付近を一日中探して歩いたエピソードが残っています。

このティンパニーについては、もう一つのエピソードがあります。それはドイツ人捕虜たちが帰国する直前の大正８年（1919）12 月 19 ～ 21 日にかけて、市内恵比須座で開催された「独逸人演芸会」でのこと。この時の音楽演奏を、九大フィル（注３）のメンバー数人が聴きに来ていました。彼らは、捕虜たちが帰国のため処分されるティンパニーとホルンを購入することにしました。

水がめのティンパニーは愛称「ドンガメ」。大正９年（1920）３月 13 日の福岡市記念館での演奏会に初登場し、なかなか迫力のある音を響かせたそうです。しかし、この後の熊本演奏旅行の帰途、駅員の不注意でヒビが入り、残念ながら演奏不能となりました。

なお、九大フィルは大正 13 年（1924）１月 26 日、皇太子（のちの昭和天皇）の結婚を祝う「御成婚奉祝音楽会」で、「第九」最終楽章「歓喜の歌」を演奏しました。歌詞は原曲とは異なり御成婚を祝う内容でしたが、日本人による「歓喜の歌」の初演奏とされています。ドイツ兵捕虜たちが伝えた近代ヨーロッパの音楽は、確実に日本の音楽文化に受け継がれていったのです。

収容所バラックでのコンサート



ドイツ捕虜コンサート以前に久留米高等女学校で開催された、市民楽団「久留米共鳴会」による第 3 回演奏会の様子〔大正 7 年（1918）6 月 2 日〕

（注 1）正式名称は、交響曲第九番ニ短調作品 125 合唱付き

（注 2）本文中では、ドイツ語の発音に近い「ベートーヴェン」と表記したが、引用文中では、訳者の標記を優先した。

（注 3）九大フィルハーモニー・オーケストラは、九州大学医学部の前身、福岡医科大学の榊保三郎教授によって創立、明治 42 年（1909）活動開始。

企画制作　久留米市 市民文化部文化財保護課・総合政策部広報戦略課
令和元年（2019）12 月 6 日　発行